#1章　キマらない前髪とキメキメの復学生

　　第一章 没决定好的刘海和决定好的复学生

#　鏡に映った少女がこちらをんでいる。

　　镜子里映衬出的少女正聚精会神地盯着自己。

#　根元まで染められたホワイトブロンド。カールがかったオレンジ色の毛先。目元で激しく輝くグリッター。耳のワンポイントピアスと首のチョーカー。着崩した学生服の上で浮かぶリボン。短いチェック柄のスカート。足につけたガーターリング。

　　直到发根都染成白金色的头发。卷曲着的橘色发梢。惹眼地闪烁着的闪粉眼影。耳朵上打了耳钉，脖子上戴着颈环。宽松地拢在身上的校服上扎着大大的蝴蝶结。不及膝盖的格子短裙。最后是扎在腿上的腿环。

#　は洗面台の鏡を睨みつつ、ビビッドピンクのヘアアイロンで前髪を挟んでいた。

　　盛黄琉花一边看着洗手台上的镜子，一边用亮粉色的卷发棒烫着留海。

#「よし、よし……そのままー……そのままー……」

　　「好，好……就这样—……就这样—……」

#　小声を出しつつ、慎重にヘアアイロンを前へ前へと滑らせていく。

　　琉花小声地念叨着，把卷发棒谨慎地一点点向前滑动。

#　気の緩みは許されない。それがヘアセット。それがオシャレ。

　　不容丝毫松懈。这就是造型。这就是潮流。

#　一日の気分を決めるのは今この瞬間なのだから。

　　因为一日之计就在这个瞬间。

#「ここだっ！」

　　「好！」

#　くいっと手首をひねると、毛先がヘアアイロンに沿って持ち上がり、ぺたりと額の上でってしまった。

　　琉花猛地一转手腕，发梢顺着卷发棒向上卷起，轻巧地拢在额头前。

#「うえぇぇ～……」

　　「呜诶诶诶~……」

#　後ろ髪だけでなく前髪にもカールをかけたかったのに、これでは戦国時代の姫だ。

　　本想着把前后的头发都卷起来的，结果这个样子简直就像是战国时代的公主一样了。

#　失敗も失敗。大失敗だ。

　　失败啊失败。大失败。

#「あんたも寿命かぁ？」

　　「你也要坏了吗？」

#　このヘアアイロンはフリマアプリで買った中古品で、いつ故障してもおかしくはない代物ではあったが、どうやら今日が命日だったようだ。

　　这个卷发棒是在购物APP上买的二手货，不过是个随时都可能坏掉的替代品而已，看来它的命数就是今天了。

#　今までありがとう。あんたのことは忘れない。

　　感谢一路陪伴。我不会忘记你的。

#　短いを捧げた後、琉花はヘアアイロンをに置いて鏡に向き直った。

　　短暂地默哀之后，琉花把卷发棒放到侧腹夹住，再次看向镜子。

#「んー、姫カはやべー女感でるし……流すだけ流しとくかぁ？」

　　「嗯—，公主切有种地雷女的感觉……不如就这样吧？」

#　前髪セットのために洗面台の棚からブラシとドライヤーを取り出していると、背後から物音が聞こえた。

　　琉花从洗脸台的架子上拿出造型梳和电吹风，打算调整发型的时候，听到身后传来一些动静。

#「琉花ちゃん。どうしたの～？」

　　「小琉花。在干什么呢~？」

#　鏡越しに後ろを見ると、眠たそうな表情の女性がこちらをいていた。

　　从镜子里看向身后，有一个满脸睡意的女性在瞄着这边。

#　琉花を茶髪にして体を成長させたようなその女性は、盛黄という名前を持っていた。

　　这位头发是茶色的大号琉花，名为盛黄凉子。

#「りょーこさんこそどしたの？」

　　「凉—子才是在干什么呢？」

#「なんか悩んでるみたいだったからぁ……母親としては心配でぇ～……」

　　「看你像是在烦恼着什么……我作为母亲有点担心嘛~……」

#「ただ前髪がうまくキマんなかっただけ。りょーこさんは寝てて」

　　「只是留海没弄好而已。凉—子就去睡觉吧」

#　涼子は付近の病院で看護師として働いていた。人手不足の影響か、準夜勤や夜勤のシフトにつくことが多く、琉花が家にいる時間帯はたいてい眠そうにしていた。

　　凉子在附近的医院当护士。或许是因为人手不足，安排了不少晚班和夜班的轮班。因此她在家里的大多数时间好像都在睡觉。

#「大丈夫だよ～。琉花ちゃんはいつもかわいいから～」

　　「没关系的啦~。毕竟小琉花一直都这么可爱~」

#「りょーこさんコメはエビタイム同じなんで信用できねっす」

　　「凉—子给出的评价就和エビタイム之类的一样不可信」

#「あたしゃいつも真剣だよ～……ふぁぁぁ～……」

　　「我一直都不是开玩笑哦~……呜啊——~……」

#　涼子は大きなあくびとともに頭をうつらうつらと揺らしている。褒め言葉はしかったが、これ以上母の貴重な睡眠時間を削りたくない。

　　凉子的脑袋昏昏沉沉地摇晃着，打了个大大的呵欠。尽管听到母亲的赞美十分开心，但琉花不想继续打扰母亲宝贵的睡眠时间了。

#　琉花はささっと前髪のセットを終えると、床に置いたスクールバッグを肩にかけた。

　　利落地打理好留海，琉花背起放在床上的学生包。

#「んじゃ、そろそろ出ますわ」

　　「那，我差不多该出门咯」

#　涼子の脇を抜けて玄関に向かい、ローファーをいて引き戸に手をかける。

　　琉花走过凉子身边，迈向玄关。穿上平底皮鞋之后把手搭到了拉门把手上。

#「やーす！」

　　「走—了！」

#「ちゃんと行ってきますって……言ったほうがいいよ……」

　　「好好说我出门了……比较好哦……」

#「まーす！」

　　「好—的！」

#「そ、そ、そ、それ、ちゃんと言えてなひぃ……」

　　「这，这，这，这个，也说清楚点啊呵啊……」

#　あくびまじりの、ひってらっしゃぁ、という見送りを聞いて外に出ると、六月の湿気が琉花の首をでた。夏が近い。そろそろ衣替えをしたほうがいいかもしれない。

　　琉花听着混合着呵欠的送别来到屋外，六月的湿气拂过脸颊。夏天近了。差不多也该是把衣服换季的时候了。

#　振り向くと、古びた和風の家が立っていた。

　　一转身，一幢古老的和式别墅展现在眼前。

#　周囲にある建物は洋風で、この家だけ明らかに浮いている。かわいくないし、イケてない。なにか趣があるわけでもない。

　　在周围的洋房的衬托下，这一家显得格外独特。既不可爱，也不帅气。更是毫无趣味。

#　それでも琉花は自分が生まれ育ったこの家が好きだった。

　　即使这样，琉花依然喜欢着这个生养了自己的家。

#　かつて祖父母が結婚記念として建てた家。琉花をここまで育ててくれた家。多くの思い出が詰まった大事な家。

　　这是祖父母曾作为结婚纪念而建造的家。还是把琉花养育至今的家。是充满着诸多回忆的重要的家。

#　今はいない祖父母のことを思い出しつつ、琉花は家に向けて少し頭を下げてから、やかな足取りで登校を開始した。

　　回想着早已辞世的祖父母，琉花对着家门稍稍低头行礼，然后踏着轻快的脚步前往学校。

#

#　盛黄家から徒歩十五分。琉花の住む地区の端っこにその高校はあった。

　　从盛黄家步行十五分钟。有一所高中在琉花住着的这片地方的角落里。

#　都立高校。ヒエコーとも呼ばれるこの高校は、まあまあの広さとそこそこの偏差値を持っていた。頭髪や服装はかなり自由で、スマートフォンの持ち込みも許可されている『ゆるい』高校でもあった。

　　都立飞燕高中，也叫做燕高。占地面积不大不小，学生成绩还算过得去。是一所对发型和服饰的要求十分宽松，甚至可以携带智能手机上学的『宽松』高中。

#　校門を抜けて箱で上履きに履き替え、二階に登って二年二組に入った時、教室はすでにクラスメイトでれていた。

　　琉花走过校门，在鞋柜处换上室内鞋。登上二楼，走进二年二班教室的时候，教室里已经有了许多同学。

#　運動部グループ。グループ。サブカルグループ。それぞれのグループがそれぞれの朝を繰り広げている。

　　运动组。正经组。亚文化组。各个小团体在一起度过各自的早晨。

#　琉花が教室の奥に進んでいくと、自席の近くにふたりの女子生徒が座っていた。

　　琉花走进教室，她的座位旁边已经有两位女同学先到了。

#「はーっす！　ひな！　めい！」

　　「早—！日菜！芽！」

#「はろー！」

　　「哈喽—！」

#「おは」

　　「早好」

#　あいさつバラバラすぎっしょ、と笑いながら席につくと、シャンパンピンクの髪をツインテールに結った少女、ひなるが不満げな声を出した。

　　这样打招呼真是不成样子，琉花一边笑着坐到自己的位置上。这时，扎着双马尾、把头发染成香槟粉的少女，日菜瑠发出了不爽的声音。

#「ぐぅー……るかちん。これ見てぇ」

　　「唔—……琉花亲。看看这个」

#「ん？　なんこれ？」

　　「嗯？这是什么？」

#「ひなたちの最新作だも」

　　「是我们舞蹈部新拍的视频」

#　ひなるのスマートフォンにはディップズィップというＳＮＳが表示され、ひとつのショートムービーが流れていた。

　　日菜瑠的手机上打开了tiptop，在播放一条短视频。

#　ムービー中には飛燕高校ダンス部が映っており、そのセンターはひなるだった。廊下を背景に、ひなるは手足をなめらかに動かし、メッシュをいれたツインテールを激しく振り回している。彼女たちのダンスにはキレがあり、少し見ただけでもそのクオリティの高さが伝わってきた。

　　视频里面是飞燕高中的舞蹈部，日菜瑠站在她们中间。她在走廊里，灵活地活动着身体，染着挑染的双马尾来回晃动。她们的舞蹈十分精彩，仅看短暂的几秒就能感受到其中水平之高。

#「おおー、いー感じじゃん」

　　「哇哇—，这不是跳得很棒嘛」

#「そこはそーなんだけど、コメ欄見て」

　　「跳是跳得还行啦，但你看评论区」

#「え？　あー……こりゃー……」

　　「诶？啊—……这是—……」

#　ダンスの出来がいいからか、りの曲を選んだからか、動画の再生数はかなり多かった。

　　或许是舞姿优秀，也可能是选择了流行的曲子。视频的播放量相当高。

#　それと比例するようにコメントの数も多く、

　　因此评论数也照着比例一样多了起来，

#「ムネユレごちですー、とか、おもっと振ってー、とか……セクハラコメうざすぎ。うざすぎうざすぎー」

　　「胸再晃多点——之类的，屁股再扭多点——之类的……这些性骚扰评论太烦了。真烦真烦真烦—」

#　ＳＮＳで活動するということは不特定多数の人々に見られるということだ。その上、女子高生のダンスとくれば、そういう類のコメントを集めることは当然かもしれない。

　　活跃于社交软件，也就意味着会被不特定的各种人所看到。再加上又是现役女子高中生的舞蹈，会出现许多这种类型的评论说不定也是正常的吧。

#　とはいえ、ひなるが怒ったところでこういった人間がコメントをやめてくれるわけではないし、ただ疲れるだけだ。最善策はちまちま運営に通報すること。怒るだけ無駄。

　　话虽如此，不管日菜瑠再怎么生气，这些人也不会停下评论，生气只会让她徒增疲劳而已。最好的办法是把这些评论逐个向管理员举报。只是生气是没用的。

#　わかっているのに琉花の中から怒りがいてきた。

　　道理都懂，但琉花还是怒从心头起。

#　ひなるは自分の友達だ。ゆるふわメイクや不思議な語尾で自分なりのかわいさを目指すかわいいかわいい大事な友人。そんなひなるが顔も知らないかに困らされているなんて、黙っていられない。

　　日菜瑠是自己的朋友。用轻飘飘的妆容和神奇的口癖追求属于自己的可爱的重要的朋友。琉花看着这样的日菜瑠，竟被甚至没见过面的人烦扰，无法坐视不管。

#「なんかムカついてきた……ひな、スマホ貸して。コメ返しすっから」

　　「真是无名火起……日菜，手机给我。我来回评论」

#「る、るかちんが怒ってどうすんだも」

　　「琉，琉花亲生气了，怎么办嗼」

#「あたしだってダンス部だし、仲間のためなら一肌剝くよ」

　　「我也是舞蹈部的一员，也要给大家贡献一笔之力啊」

#「ユーレー部員がなに言ってんだも……あと、くじゃなくて脱ぐだも」

　　「幽灵部员在说什么呢……还有，不是笔是臂嗼」

#　ひなるは苦笑いしつつ琉花からスマートフォンを遠ざけた。

　　日菜瑠一边苦笑着一边把手机从琉花身边拿远了。

#　力になることはできなかったが、ガス抜きにはなったようだ。悔しいが今はこれで引き下がることにしよう。これ以上やると逆に怒られるし。

　　没能帮上忙，但日菜瑠看起来也已经消气了。虽然有些不甘，今天就这样作罢算了，再坚持的话可能反倒又会惹得日菜瑠生气。

#「んー……」

　　「唔—……」

#　別の悩ましげな声が聞こえたので後ろを向くと、黒い髪にインナーカラーをいれた少女、めいりがをひそめてスマートフォンを眺めていた。

　　听到了别处传来的烦恼声，琉花向后转身，看到一位做了挂耳染的黑发少女，芽里正皱着眉头盯着自己的手机。

#　着崩したブラウスのからネックレスが覗き、鎖骨の間でゆらゆら揺れている。ファッション雑誌の読者モデルをしていることもあって、めいりの苦しげな表情はどこかになっているように見えた。

　　从宽松的衬衫领口可以一窥在锁骨间来回摇晃的项链。芽里已经在时尚杂志当上读者模特，微皱的眉头让她看起来就像画中人一样。

#「めい。どした？」

　　「芽。怎么了？」

#「や、ウチが欲しかったリップがマルオクに出てんだけどさ」

　　「没事，只是看到有支我想要的口红在丸玉上卖」

#　めいりのスマートフォンではマルオクというオークションサイトが開いており、リップクリーチャーと書かれたパッケージの写真が表示されていた。

　　芽里的手机上打开着一个名叫丸玉的拍卖网站，显示着一张照片，其中的牌子上写着口红造物。

#　リップクリーチャーとは、『落ちにくいリップ』として日本の化粧品メーカーが売り出したコスメであり、全国で売り切れを続出させた大人気商品だ。マルオクのようなオークションサイトに出品されていることからもその人気の高さがわかる。

　　口红造物，日本化妆品公司KATHY推出的一款『防脱口红』，是上市之后在全国范围内销售一空的高人气商品。

#「……って、なんか高くね？」

　　「……感觉，好像还挺贵的？」

#　めいりが見ているページのリップクリーチャーは、定価よりも少々高めに設定されていた。

　　芽里看着的画面中的口红，定价偏高了一些。

#「マルオクだかんね。ちょい割高」

　　「丸玉嘛。会贵一点」

#「あれってプチプラっしょ。プチプラなのにこの値段って」

　　「那个是平价款吧。平价款怎么还标这个价」

#「わかってる。わかってんだけど、店に並んでないし……」

　　「我知道的啊。明白是明白，但我不想去店里排队……」

#　めいりはめを吐いた。

　　芽里叹了口气。

#　友達が困っているのなら助けてあげたいが、お互いの財布事情もある。琉花とめいりは中学時代からの付き合いだが、そこは安易に口出しできない領域だ。

　　虽说琉花看到朋友身处困扰就想帮忙，但这是和金钱相关的事情。尽管琉花和芽里从中学时代就是朋友了，但这也不是轻易就能插手的话题。

#　そうやって琉花が賛成でも反対でもないな態度を取っていると、

　　当琉花想着于是就用不赞成也不反对的模糊态度应付过去的时候，

#「めいちって前もなんも考えずにクリーム買ってされてたし、今回もたぶん失敗だからバカ見る前にやめといたほうがいいも」

　　「芽里亲之前买润肤乳的时候就因为考虑不周被骗了，这次多半也不行的。所以在出洋相之前还是赶紧放弃比较好」

#　空気が凍った。

　　空气冻结了。

#　ひなるが言った通り、めいりはオークションサイトでの買い物に失敗したことがある。

　　就像日菜瑠说的一样，芽里在网购的时候遭遇过失败。

#　今回のようにパッケージ写真が並んでいる高級クリームを見て、悩みに悩んだ末に購入すると、なにも入っていない空箱が家に届いた、という詐欺にあったのだ。一応、返品はできたようだが、あの数日間のめいりは非常に触れにくい存在だった。

　　和这次一样，看到了陈列着包装的照片的高级润肤乳，思来想去最后下了单，结果快递到家的却只是个空盒子。芽里遭遇的就是这样的骗局。尽管可以退货，但那几天的芽里就像是个炮仗一样难以靠近。

#　やめたほうがいいかも、という気持ちは琉花にも共感できたが、それならばせめてもう少し柔らかい言い方をして欲しかった。

　　尽管琉花也和日菜瑠一样，觉得芽里可能还是别买比较好点，但也希望日菜好歹该表达得委婉一点。

#「……ひなだって同じようなことしたでしょ」

　　「……日菜不也遇到过同样的事情」

#　めいりの声には不機嫌さがんでいた。

　　芽里的声音里已经浸满了不快。

#「前にひながパチモンのアクセ買わされた時さ。ウチと琉花で慰めまくったじゃん。それ忘れてんなら……バカはあんたでしょ」

　　「你之前买到高仿项链的时候啊。还是我和琉花一起安慰你的吧。连那都忘了的话……是你的脑袋比较有问题吧」

#「今、それ関係なくない？」

　　「现在这个，和那个又有什么关系？」

#　ひなるの顔が険しくなる。外見が幼いので迫力は薄いが、怒りの波はそばにいる琉花にも伝わってくる。

　　日菜瑠的脸色严肃了起来。尽管她小孩子一样的外表并没有产生多少压迫感，但其中的怒火还是传给了她身边的琉花。

#　ふたりの友人が火花を散らし合っている……朝っぱらから……結構しょぼい理由で！

　　两位友人间摩擦出了火星……这才一大早……还是出于十分糟糕的原因！

#　突如した衝突を前にして琉花はひそかに嘆息した。

　　面对这突如其来的矛盾，琉花小小地叹了口气。

#　これは小競り合いであって本当の意味でのではない。数日間は口を聞かない仲になるかもしれないが、いつの間にか勝手に仲直りしている。これはそういう規模の戦いだ。だから、いちいち心をざわめかせる必要もない。

　　这只是一点小摩擦，还算不上真正意义的吵架。这两人或许会有几天互不理睬，但不知不觉间就能重归于好。这次也只不过是这种程度的矛盾而已。所以完全没有为她们担心的必要。

#　でも、その数日間が面倒くさいんよ……。

　　只是，那样的几天会过得比较艰难……。

#　ふたりが仲直りするまでその間を右往左往するのは琉花だ。かなり面倒くさいし、楽しくない。楽しさ至上主義の生き方を目指す琉花にとって避けたいことだ。

　　在她们重归于好之前，琉花就被夹在中间了。相当麻烦和难受。这是奉行娱乐至上主义的琉花想要避免的局面。

#「いんや、ふだりどもバカじゃね」

　　「不对，你们两个都不是笨蛋」

#　琉花が口を挟むと、ひなるとめいりは一気に白けた表情になった。

　　听到琉花插嘴，日菜瑠和芽里一下子都拉下了脸。

#「るかちん。なにそのり？」

　　「琉花亲。你说什么呢？」

#「誰真似？　ってかなに真似？」

　　「你说谁？谁怎么了？」

#　ふたりの抗議を無視して、琉花は話し続ける。

　　琉花没管两个朋友的抗议，继续说了下去。

#「おめいがリップクリーチャー買うかどーが悩んでんのは、前の失敗を覚えでっがら。ぞだよな？」

　　「芽里一直犹豫着要不要买口红，就是因为之前的失败。是这样吧？」

#「そうだけど……本当になんなのそれ」

　　「确实是……但你到底什么意思」

#「んで、おひなは、おめいがまだ悲じむのがやだがら、づえー言葉でめざぜようどじだんだ。ぞだよな？」

　　「然后，日菜，是觉得芽里就这样犹豫着也没用，干脆用强硬一点的话让芽里放弃算了。是这样吗？」

#「そーだけども……き、聞き取りにくいも……」

　　「是—是这样啦……好好和芽里说，她也听不进去嘛」

#　顔をしかめるふたりに対して、琉花は大げさにいてみせた。

　　面对皱着眉头的两个朋友，琉花特意大大地点了点头。

#「失敗がら学ぶやつをオラはバカだと思わね。気遣いでぎるやづをオラはバカだど思わね。んだがら、オラはふだりどもバカだどは思わねー……おめえさんがたはどーだ？」

　　「我不觉得失败之后愿意吸取教训的人蠢，也不觉得在意朋友的人是笨蛋。所以，你们两个都不是笨蛋—……你们两个觉得呢？」

#　琉花がそう言うと、ひなるとめいりはお互いに顔を合わせ、気まずそうに目をそらした。

　　听到琉花的话，日菜瑠和芽里互相看了看，但又像是有些不快一样看向了别处。

#「ひなが気遣ってくれてるってのはわかってるけど、でも言い方がさ」

　　「我知道日菜在担心我，就是她的说法嘛」

#「そだね。ちょっとひなの言い方が悪かった……かも……」

　　「是啊。我的说法……或许……是有些不好」

#「や、言ってることは正しいし、気遣ってんのは伝わってるから……謝んなくても別に……」

　　「不过，日菜说的没错，谢谢你担心我……不用道歉的……」

#　ふたりはそう言ってごにょごにょき、もじもじ始めた。

　　两个人小声地嘀咕了一下，都有些不好意思。

#　おー、かわいーやつらめ。

　　啊——，我可爱的朋友们。

#　先程まで漂っていた刺々しい雰囲気がなくなっている。面倒くさい事態を避けることに成功したようだ。気分がいい。

　　先前漂浮于周围的火药味已经荡然无存。成功阻止事情变得麻烦。琉花心情舒畅。

#　琉花はふたりに向かって満足気に笑いかけた。

　　琉花向着朋友们绽开了满足的笑容。

#「つか、そんなんで恥ずがるヒツヨーないって。あたしなんてお金くれるっつーから、おっさんについてったらホテル連れ込まれそうになったけど恥ずがってねーし」

　　「而且，也没必要这么不好意思吧。像我，因为大叔说会给我钱，结果差点被带到了酒店去都没有这样」

#「「それは恥ずがれよ」」

　　「「那才更该不好意思吧」」

#「あぁん？」

　　「啊嗯？」

#「わ、琉花がキレた……あ、ウチのスマホ！」

　　「哇，琉花挂了……啊，我的手机！」

#「あー、ひなの子！」

　　「啊——，琉花！」

#　ふたりのスマートフォンを奪い取り、琉花が画面に指紋をつけまくっていると、始業のチャイムが鳴った。

　　琉花抢过两个人的手机，故意把指纹印上屏幕的时候，上课铃响了。

#「今日はここまでにしといてやる。おひな。自分ち帰りな」

　　「那今天就这样吧。日菜。回去座位吧」

#「も、ばれたも……」

　　「真是，琉花又搞事……」

#　スマートフォンを返すと、ひなるは肩を落として自分の席に戻っていった。後ろの席のめいりはこちらを睨みつけながら、ハンカチでスマートフォンをごしごし拭いている。

　　拿回手机之后，日菜瑠垂着肩头回到了自己的座位上。坐在身后的芽里则一边盯着自己，一边拿手帕用力地擦着手机。

#　クラスメイトたちは全員席についていた。もう少しすれば担任教師のが入ってきてホームルームが始まるだろう。

　　全部同学都坐回到自己的座位上了。班主任谷塔美应该再过一会就会过来开班会了。

#　一日の始まりに琉花がかすかな高揚を感じていると、教室の前扉が開いた。

　　琉花对这一天的开始隐隐地感到些许兴奋的时候，教室的前门打开了。

#「…………は？」

　　「…………哈？」

#　その声を誰が出したのかはわからなかった。

　　没有人知道这个声音是谁发出的。

#　騒がしめの男子かもしれないし、真面目な女子かもしれない。一匹の男子かもしれないし、眠そうな女子かもしれない。もしかしたら自分かも。

　　或许是调皮的男生，也可能是学习好的女生。或许是躁动的男生，也有可能是在打瞌睡的女生。说不定根本就是自己。

#　だが、誰が出してもおかしくはなかった。

　　只不过，不管这声音是谁发出的，都不奇怪。

#　なぜなら教室に入ってきたのは谷塔美ではなく、銀髪銀眼の美少女だったのだから。

　　因为，进入教室的并不是谷塔美，而是一位银发银瞳的美少女。

#

#　どれほど脱色を重ねても再現が難しそうな美しい銀色の髪。

　　不管再怎么脱色，恐怕都无法染出的秀丽银发。

#　カラーコンタクトを入れているのか、彼女のは銀色に染め上げられている。

　　或许是戴了彩瞳的银色的双瞳。

#　異国の雰囲気を漂わせる整いすぎた顔立ち。

　　充满着异国气息的端正五官。

#　十字架をメインとした大量のピアス。

　　以十字架为主题的大量首饰。

#　なめらかなに薄く刻まれた。

　　光滑的脸颊上浮现着浅浅的疤痕。

#　黒い光沢を放つ革手袋とタイツ。

　　黑色又富有光泽的皮手套和丝袜

#　まるでアニメキャラクターのような美少女を見て、

　　看着这仿佛从动画中走出的美少女，

#「ア、アニメキャラだ……」

　　「是，是纸片人……」

#　琉花は思い浮かべたままのことを呟いていた。

　　琉花就这样把脑海中浮现的想法小声地说了出来。

#　指定の女子学生服を着ているので飛燕高校の生徒であることは間違いない。だが、あんな派手な容姿の美少女は今まで見かけたことがない。

　　她穿着规定的女式校服，因此可以确定是飞燕高校的学生。但是，琉花从未见过学校有容貌如此耀眼的美少女。

#　クラスメイトたちも銀髪美少女の登場に衝撃を受けているらしく、近場の人間とき合っていた。

　　同学们好像也都因银发美少女的出现遭受了冲击，开始和旁边的人说起话来。

#「あれ、誰……？」

　　「她，是谁……？」

#「なにあの髪色。バンギャってやつ？」

　　「那是什么发色。玩视觉系摇滚的？」

#「すっげえ美人……いや、でも、ちょっとこえーな」

　　「真是太好看了……不过，还是，有点吓人啊」

#　あの美少女を知る人間は誰もいないらしい。

　　看来没有人知道那位美少女到底是谁。

#　トントンと肩をつつかれて振り返ると、めいりが顔を近づけていた。

　　被身后的芽里拍了拍肩膀，琉花转头看向后面。芽里凑了过来。

#「琉花。あの子どう思う？」

　　「琉花。你觉得她怎么样？」

#「顔がいい」

　　「很好看」

#「それはそう」

　　「那当然啊」

#　そんなことを話していると、銀髪美少女が動き始めた。

　　刚刚说了两句话，银发的美少女又有所行动了。

#　彼女は教壇に置いてある席順表を眺めた後、周りを圧倒するようなきびきびした動きで教室の中央を通り過ぎ、一番後ろの席──二年に進級してから誰も座らなかった席──に座った。

　　她看了看讲台上的座位表，带着压倒性的气势，灵活地穿过教室中间，来到最后面的座位——升上二年级以来一直无人使用的座位——坐下了。

#　そこに座るんだ……。

　　坐在了那里……。

#　銀髪美少女の動向を見守ったクラスメイトたちが奇妙な連帯感を覚えていると、教室に小太りの女性が入ってきた。

　　关注着银发美少女的动作的同班同学们都感受到了同一种奇妙的感觉。这时，一位身材丰满的女性走进了教室。

#「はーい。みなさんおはようございまーす。朝のホームルームの時間ですよー」

　　「好——。大家早上好啊。早上的班会时间到了哟——」

#　二年二組の担任兼、日本史教師兼、二児の母である谷塔美は教室に入ってくると、生徒に柔らかい微笑を向けて、

　　二年二班的班主任，兼日本史老师，同时还是两个孩子的母亲的谷塔美走进教室之后，用温柔的微笑看向同学们。

#「ん～？　んん～？」

　　「嗯~？ 嗯嗯~？」

#　そして教室に銀髪美少女を見つけると、それを徐々に打ち消した。

　　当她看到教室里的银发美少女之后，这笑容就缓缓消失了。

#　谷は教壇上の席順表と出席簿を見比べ、次にそれらと銀髪美少女を交互に見比べ、絞り出すように言った。

　　谷塔美来回对比着花名册和讲台上的座位表，然后再在它们和银发美少女之间来回确认之后，从嘴角里挤出了一句话。

#「も、もしかして……さん？　ですか？」

　　「你，你是……四十七同学？是吗？」

#　谷が、しじゅうなな、という不思議な名字を口にすると、美少女はを引いて静かに立ち上がった。

　　四十七，这个奇怪的名字从谷塔美口中吐出后，美少女拉开椅子，静静地站了起来。

#「はい。四十七です。谷先生。初めまして。おはようございます」

　　「是的。我是四十七。谷老师。初次见面。早上好。」

#「あ、はい。はじめましてございます……」

　　「啊，好的。初次见面……」

#　美少女のとした声は谷から落ち着きを奪い取った。

　　美少女直爽的回答让谷老师平静不下来。

#　二年二組の担任教師は迷子になった子どものようにし、助けを求めて教室のそこら中に目をさまよわせてから、問題に直面しなければいけないことを自覚して、銀髪美少女に向き直った。

　　二年二班的班主任一时间像迷路的孩子一样狼狈，她求助的眼神在教室的同学们身上彷徨了一会后，意识到自己不得不直面问题。于是重新看向了银发美少女。

#「ふ、復学は明日からじゃ……？」

　　「复，复学不是明天吗……？」

#「一日でも早く授業を受けるために本日から登校開始することにしました。学校には連絡をしましたが……谷先生はお聞きになっていないということでしょうか」

　　「尽管只差一天，但我还是想尽早开始学习，所以已经决定从今天就开始上学了。虽然已经联系过学校……但谷老师您好像还没收到消息」

#「あ、はい……お聞きになっておりません…………ごめんなさい」

　　「啊，好的……确实没有收到消息……抱歉」

#　谷の言葉が尻すぼみに消えていく。

　　谷塔美的声音越来越小。

#　その様子はいじめられているようで、琉花は銀髪美少女への反発を覚えた。あのお人好しの谷ちゃんをいじめるなんて。ひどい美少女だ。

　　看到谷老师像是被欺负了的样子，琉花心里对银发美少女产生了反感。竟然欺负那样老好人的谷酱。真是个过分的美少女。

#「で、では、今日から四十七さんは復学する……ということで……四十七さん。クラスのみなさんに自己紹介をお願いできますか？」

　　「那，那么，今天开始四十七同学就复学了……所以……四十七同学。可以向同班的大家介绍一下自己吗？」

#「承知しました」

　　「好的」

#　そう言うと、銀髪美少女は生徒たちの間を通り、谷の隣に並び立った。

　　说完，银发美少女就穿过桌椅的间隙，站到了谷老师的旁边。

#　彼女は黒板に自分の名前を書いてから、直立姿勢で教室を一望した。見定めるような鋭いしに、自然とクラスメイトたちの囁きが静まっていく。

　　她在黑板上写下自己的名字，随后站着看了一圈教室。她那仿佛盯着自己的锐利的眼神，自然而然地平息了同学们的窃窃私语。

#「初めまして。本日から復学いたしました四十七です。海外に長期滞在していたこともあり、日本の常識にくなっているかと思います。失礼があった際はご注意いただけると幸いです。休学していたため年齢はひとつ上となりますが、敬語は不要です」

　　「初次见面。我是从今天开始复学的四十七银华。因为长期生活在海外，对日本的常识不甚了解。如有冒犯还希望大家包涵。虽然我因为休学，比大家大了一岁，但也不必和我用敬语」

#　流れるように自己紹介を言い切ると、銀髪美少女、四十七銀華はクラスメイトに向けて一礼した。

　　流利地说完了自我介绍后，银发美少女，四十七银华向大家鞠了一躬。

#「よろしくお願いいたします」

　　「请多关照了」

#　彼女の一挙一動は美しく、圧倒的で、二年二組の一同はなにも言葉を発せなかった。下手なことを言えば押しつぶされてしまう。そんなプレッシャーがあった。

　　她美丽又有压迫感的一举一动，使得班级中一片寂静。大家都感受到了压力，仿佛说了什么蠢话就立刻会被她的气场压倒。

#　静寂と緊張に満たされた教室の中で、ためらいがちの拍手が起こる。

　　在这充满了寂静和紧张的教室里，响起了有些犹豫的拍手声。

#「は、はい。みなさん拍手～」

　　「好，好的。大家鼓掌~」

#　谷の号令に合わせてクラスメイトたちが慌てて拍手をする。その音はまばらで、歓迎を表現しきれていなかったが、四十七は気にすることなく自席へ戻っていった。

　　随着谷老师的发言，班上的大家慌慌张张地鼓起了掌。零零落落的掌声显得并不十分欢迎她的到来，但四十七毫不在意地回到了自己的座位上。

#　六月の初め。銀髪銀眼の美少女、四十七銀華は復学してきた。

　　在六月的开头。银发银瞳的美少女，四十七银华复学了。

#　後日、耳にしたことだが、ほとんどのクラスメイトはこの時こう考えていたらしい。

　　后来，琉花才知道。那天几乎所有同学都是这么想的：

#　やべーやつが来た、と。

　　真是来了个不得了的家伙。

#

#　その日の授業は全体的にぎこちなかった。

　　那天的每节课都不太对劲。

#「四十七さん。その髪は……？」

　　「四十七同学。你的头发……？」

#「地毛です」

　　「我没染过」

#「な、なるほど……失礼……」

　　「这，这样啊……抱歉……」

#　これは現代文教師と四十七銀華のやりとり。

　　这是现代文老师和四十七银华的对话。

#「そ、そのまなこは真なりや？」

　　「你，你戴了美瞳吗？」

#「生まれつきです」

　　「天生就这样」

#「げ、げに……」

　　「原来如此……」

#　これは古文教師と四十七銀華のやりとり。

　　这是古文老师和四十七银华的对话。

#「ティーチャー谷からお話はうかがいました。ミズ四十七は海外留学していたんですよね。ナイストゥーミーチュー」

　　「从Teacher谷那里听说了。Miss四十七在海外留过学对吧。Nice to meet you」

#「初めまして。先生は母音のアクセントが強めですね。どちらで英語を学習されましたか」

　　「初次见面。老师的母语口音很重啊。是在哪里学的英语呢？」

#「…………海外に行ったことないです」

　　「…………老师没有去过国外」

#　これは英語教師と四十七銀華のやりとり。

　　这是英语老师和四十七银华的对话。

#　授業が終わる頃、英語教師は半泣きになっていた。

　　下课的时候，英语老师已经快哭出来了。

#　午前の授業が終わり、琉花とひなるは昼食を買うために一階の購買部に向かった。

　　上午的课程结束后，琉花和日菜瑠前往一楼的小卖部买午餐。

#　めいりは弁当を持ってきているので教室で待っている。読者モデルをしていることもあり、めいりの弁当は緑一色だった。琉花にも読者モデルにれる気持ちが少しはあったが、あれを見るとその気持ちはしぼんでいった。

　　芽里带了便当，所以在教室里等着他们。考虑到读者模特的工作，芽里的便当中清一色都是蔬菜。琉花对读者模特的那一丝憧憬，在看到芽里的午餐之后便一扫而空了。

#「四十七ちゃん、ヤバかったね」

　　「小四十七，不得了啊」

#　購買部の列に並んでいると、ひなるが笑い混じりに話しかけてきた。

　　在小卖部前排上队后，日菜瑠就笑着提起了话头。

#　四十七の教師たちへの対応を思い出しつつ、琉花は頷き返す。

　　一边想着四十七对老师们的态度，琉花点点头。

#「そーだね。あれは鬼ヤバ」

　　「是—啊。真是不得了啊」

#「センセーたちもビビってたし、いつかなんかやらかしそうだも」

　　「对老师们也是那个样子，感觉她好像伺机要做点什么一样嗼」

#「やらかしっつーなら、もうやらかしまくりだし」

　　「要说伺机而动的话，不如说早就动手了吧」

#「それなー」

　　「确实啊—」

#「ま、復学したてで慣れてないだけっしょ。すぐ落ち着くって」

　　「总之，应该只是刚刚复学还没习惯而已。她很快就会冷静下来的」

#　四十七は教師たちを圧倒してはいたが、悪意があるようには見えなかったし、要領が悪いようにも見えなかった。あの態度は長い海外生活の影響によるもので、そのうち日本のコミュニケーションに迎合していくだろう。

　　四十七对老师们态度不太好，尽管琉花从中并没有感受到恶意，但她看起来也不像是不知如何应对。这样的态度是长期海外生活的影响的话，以后也会慢慢变得适应日本的交流方式吧。

#　琉花がそう結論づけていると、購買部の列がぴたりと止まった。

　　琉花刚刚下定这个结论，小卖部的队列突然就停下来了。

#　列を構成する生徒たちが定まった方向を見つめている。生徒だけではなく、教師や購買部の職員たちもそうしていた。

　　排队的学生们一起看向了一个方向。而且不止是学生，老师和小卖部的员工们也都看向了那个方向。

#　彼らと同じく琉花とひなるも首を傾けると、向こう側に銀髪の美少女が立っていた。

　　和他们一样，琉花和日菜瑠也看过去后，视线的另一端站着一位银发美少女。

#　指導室の前で四十七は教師たちに囲まれてなにか話していた。復学について話しているのか。今日の授業態度について話しているのか。ここからではよく聞こえない。

　　老师们在指导室前围着四十七，不知在说些什么。不知是复学相关的事情，还是今天上课态度的事情。在这里听不清说话的内容。

#　ただ廊下に立って話しているだけなのに、彼女はこの場の人間たちの注目を集めている。誰もが認めるほどの圧倒的な存在感。それが四十七銀華から放たれている。

　　只是站在走廊上说话而已，她就吸引了在场所有人的注意力。四十七银华的身上不断地释放着谁都无法忽视的压倒性的存在感。

#「……ありゃ、時間かかりそーだ」

　　「……啊呀，抓紧时间」

#　呟いた後、琉花は前の生徒の肩をいて列を進ませた。

　　念叨了一句之后，琉花敲了敲前面学生的肩膀，催他往前走。

#

#　昼食後の体育という最悪のスケジューリングにげんなりしながら廊下を歩く。

　　午饭后最讨厌的课程就是体育课，琉花有气无力地走过走廊。

#　女子たちは全員同じような感想を抱いているらしく、だるい、早く終われ、ありえん、と呟きながら一階の女子更衣室を目指していた。

　　女生们看起来也全都是这样想着的，一边说着真累、快点结束吧、真受不了一边走去一楼的女子更衣室。

#　琉花としても食後の体育は気だるく、避けたいことではあったが、それよりも気になっているのはメイク崩れのことだった。

　　琉花不喜欢饭后的体育课，这是她想要避免的事情之一，但更让她在意的是出汗会把妆弄花。

#　今日はフィックスミストでの仕上げやのリップをつけるなどの対策をしてきた。なので、めったにメイク崩れは起きないとは思うが……それでもそわそわしてしまう。

　　为了应对体育课，琉花用上了定妆膏和染色口红。所以应该不太容易脱妆……然而还是感觉坐立不安。

#　今日の体育はどれくらいの激しさなのだろうか。制汗スプレーは持ってきただろうか。汗拭きシートは持ってきただろうか。着替えは。代えのつけまつ毛は……。

　　今天的体育课运动量有多大呢？止汗喷雾带了吗？擦汗巾带了吗？更换的衣服呢？还有备用的假睫毛……。

#　不安から体育用のナップサックを覗くと、あ、と声が出た。

　　琉花带着不安瞄了一眼运动用的小背包，啊地叫了一声。

#「やば、タオル……」

　　「不好，毛巾……」

#　琉花が立ち止まると、先を歩いていたひなるとめいりが振り返った。

　　琉花站住之后，走到前面的日菜瑠和芽里都转过身来。

#「るかちん。タオル忘れたも？」

　　「琉花亲。忘带毛巾了嗼？」

#「いくらあんたでもタオルシェアは勘弁」

　　「我可不会借毛巾给你」

#「あたしだって嫌だっての」

　　「我也不稀罕哦」

#　めいりにツッコミをいれつつ、琉花はナップサックを閉じる。

　　回应着芽里的吐槽，琉花关上了小背包。

#　汗拭きシートや制汗スプレーは入っていたので、体育後のケアができないわけではないが、これらはできるだけタオルで汗を拭き取ってからの仕上げとして使いたい。

　　虽然带了吸汗湿巾和止汗喷雾，也不是不能在运动后做保养，但琉花还是希望可以用毛巾把汗擦干之后再用它们。

#「スクバにミニタオルがあったはず……取りに戻るから、先に行ってて」

　　「迷你毛巾应该就在我的学生包里……你们先走吧，我回去拿一趟」

#　ひなるの、りょー、という返事を聞きながら、琉花は教室に引き返した。

　　听着背后日菜瑠说着好的——，琉花扭头返回教室。

#　授業が始まる前に気づけてよかった、と安心感をいだきつつ、短いスカートをはためかせて階段を駆け上がり、二年二組の教室のドアを開くと、

　　琉花庆幸着幸好在体育课开始前发现了，飘荡着短裙冲上楼梯，打开了二年二班的门，

#　──四十七銀華がいた。

　　——四十七银华在教室里。

#　ひとりぼっちの教室で、彼女は静かな呼吸を繰り返していた。しているかのように薄く目を開き、唇からも力を抜いている。カーテンを通した柔らかいしが彼女を包み、なめらかな肌をうっすらと輝かせている。

　　她在只有她一人的教室里，平静地呼吸着。她像冥想着一样微睁着眼睛，双唇也完全放松着。从窗口投进来的柔和的阳光围绕着她，光滑的肌肤上反射出淡淡的光芒。

#　琉花は息を忘れていた。

　　琉花的心漏跳了一拍。

#　めいりはきれいだ。ひなるはかわいい。琉花だって自分の容姿やスタイルにはそれなりの自信を持っている。

　　芽里是漂亮。日菜瑠是可爱。但琉花自信自己的容貌也不输她们两个。

#　でも、自分たちがいくら努力しても、四十七銀華の持つあれは身につけられないし、絶対にわない。そんな気がした。

　　但是，自己这样的人不管付出多少努力，也无法达到四十七银华那样的高度，是绝对无法相比的。琉花就是这样的感觉。

#　……いや、なんでこの人まだ教室にいんの？

　　……不对，她怎么还在教室里？

#　体育の授業では開始前に更衣室で体操服に着替える必要がある。女子は女子更衣室、男子は男子更衣室で。

　　体育课开始前需要去更衣室换上体操服。女生去女子更衣室，男生则是男子更衣室。

#　更衣室の場所がわかんなくても誰かについてけばいいのに、と考えてから、琉花は四十七が昼休み中教室にいなかったことを思い出した。彼女は生徒指導前で教師たちに詰め寄られていたのだ。

　　即使不知道更衣室在哪，找个人跟着不就好了吗，但琉花又想起来午休的时候四十七不在教室。她在学生指导室被老师们围了个水泄不通。

#　このままだと四十七は体育の授業中、教室で瞑想し続けることになる。

　　就这样，体育课的时候四十七就只好在教室里冥想了。

#　琉花が、しじゅ……、と呼びかけたその時、

　　四十……刚刚从琉花嘴里漏出去的时候，

#「四十七さん。まだ教室にいたんだ」

　　「四十七同学。你还在教室啊」

#　別方向から女子の声がした。顔を向けると、琉花が開けたドアと反対側のドア付近に真面目グループの黒髪女子たちが立っていた。

　　听到另一边传来了女生的声音。琉花转过头去，看到与自己一门之隔的另一边就站着几位黑头发的好学生们。

#　その中から特段な雰囲気をまとったおさげ美少女が四十七に近づいていく。

　　其一位扎着双麻花辫，散发着清秀气质的美少女靠近了四十七。

#「君は？」

　　「你是？」

#「わ、私はちなみ。このクラスの委員長をしてるの。よろしくね」

　　「我，我是速水千海。现在担任班长。请多指教」

#　速水ちなみの自己紹介は早口で落ち着きがなかった。四十七銀華という存在を前にして平静を欠いているらしい。

　　速水千海的自我介绍说的很快，显得有些局促。班长在四十七银华这样的存在面前，平静不下来的样子。

#「四十七さん。体育の授業は女子更衣室で着替えるの」

　　「四十七同学。体育课是要去女子更衣室换衣服的」

#「更衣室……だから人がいないのか」

　　「更衣室……所以班上才没人吗？」

#「うん。そうなの。体操服は持ってきてる？」

　　「嗯。是的。你带了体操服吗？」

#　四十七が、ああ、と頷くと、ちなみはほっとしたように笑った。

　　四十七表示肯定地点了点头，千海像是松了口气一样笑了。

#「私たちについてきて。更衣室まで案内するから」

　　「那跟我们来吧。我们带你去更衣室」

#　ちなみが言うと、四十七が立ち上がり、彼女たちの後ろについていった。

　　千海一说完，四十七就站起来，跟在她们后面。

#　なんだ。普通に友達づくりできんのか。よかったよかった。

　　什么啊。就是普通的交朋友而已啊。太好了太好了。

#　妙な安心感と空振りをした気恥ずかしさを覚えつつ、琉花は自分の机に向かって、スクールバッグからミニタオルを取り出した。

　　心怀微妙的安心感和扑了个空的不好意思，琉花走向自己的座位，从学生包里拿出迷你毛巾。

#

#「ふぃー、疲れたぁー」

　　「呼——，好累啊——」

#　吐息を出しながら、後ろでまとめた髪を持ち上げる。

#　うなじをタオルで叩いてから、汗拭きシートで拭いていく。更衣室ロッカーの内側にある鏡を見つめる。メイク崩れはなし。朝しっかり対策しておいてよかった。カラコンずれそうになった時はビビったけど。

　　用毛巾轻拍后颈之后，再用吸汗湿巾擦汗。琉花照了照装在更衣橱柜内侧的镜子。妆没花。早上的细心处理好好地起到了作用。虽然隐形眼镜差点跑偏的时候还是慌了一下。

#　琉花がに汗拭きシートを突っ込んでいると、隣のひなるが目を細めてこちらを見ていた。

　　琉花用吸汗湿巾擦着胸口的时候，旁边的日菜瑠眯着眼睛看向了这边。

#「相変わらず琉花パイでっけーもー……」

　　「琉花的胸还是那么大嗼——……」

#「おおう、突然のセクハラ。ビビるわ」

　　「哇哇，突然性骚扰。真吓人」

#「触ってないし録音されてないんでこれはセクハラじゃないも」

　　「我又没摸，你也没录音，这可算不上性骚扰嗼」

#「アクシツってやつじゃーん」

　　「这不是老赖嘛」

#　琉花とひなるが軽口を交わしていると、体操服のをめいりに引っ張られた。

　　琉花和日菜瑠闲聊的时候，感觉芽里扯了扯自己体操服的袖子。

#「でも、あのさんにはマジで驚いたね」

　　「你看，那位大姐真的是太吓人了」

#　めいりの言った姐さんとは四十七銀華のことだ。四十七が一歳年上であるため、めいりは彼女をそう呼ぶことにしたらしい。

　　芽里说的大姐就是指四十七银华。因为四十七大她们一岁，芽里好像就打算这么称呼她了。

#　琉花たちから少し離れたところで四十七は女子たちに囲まれていた。

　　距离琉花她们稍远一点的地方，女生们在四十七的周围围成了一圈。

#　今日の体育では短距離走と高跳びを行った。授業の中で四十七は百メートルを十二秒で駆け抜け、二メートルバーを難なく飛び越えた。それらは女子の世界記録を優に越すレコードであり……真面目グループや運動部グループの四十七を見る目はがらりと変わった。

　　今天的体育课上进行了短跑和跳高。上课的时候，四十七在12秒内就跑完了百米跑，轻松跳过了2米杆。这些都是超越了女子世界纪录的数字……正经组和运动部的同学们看向四十七的眼神已经完全不一样了。

#「四十七さん本当にすごいよ！　どうやったらあんなに高くジャンプできるの？」

　　「四十七同学真的太厉害了！要怎样才能跳得那么高啊？」

#「陸上部入りなよー。全国、いや、世界目指せるって！」

　　「加入田径队吧——。拿下全国，不对，世界冠军！」

#「海外にいたって言ってたけど、なにかスポーツしてたの？」

　　「你说你之前在海外生活，有在做什么运动吗？」

#　色めきだつ周囲に対して、四十七当人は無表情のまま、考えておく、とか、詳細は言えない、と淡白な返事をしていた。

　　比起周围兴高采烈的同学们，四十七本人倒是一直面无表情。她慎重，或者说，模糊地，平淡地回着话。

#　塩対応やな～、と琉花がぼんやり考えていると、

　　很冷淡呀~，琉花含糊地想着，

#「四十七さんともっと仲良くできたらいいな」

　　「要是能和四十七同学关系更好些就好了」

#　速水ちなみのかわいらしい声が聞こえた。

　　琉花听到速水千海的可爱嗓音。

#　ちなみはすでに着替え終わっていた。琉花やめいりと違ってブラウスを着崩すこともなく、ブレザーをきちっと身につけている。清楚率百パーセントの優等生。去年学校パンフレットの被写体に選ばれたことも納得だ。

　　千海已经换好了衣服。她和穿宽松的罩衫的琉花和芽里不一样，妥帖地穿好了校服。是百分百正经的优等生。因此也不难理解为什么她的照片能登上学校的去年的宣传册了。

#「はやめてくれ」

　　「你别再跟我说谎了」

#　四十七の声は女子更衣室に不思議なほど響いた。

　　四十七这句令人始料未及的话语回荡在女子更衣室里

#　女子たちの手が揃ったようにぴたりと止まる。大半の女子は着替え途中だったので、下着姿のまま固まることになった。もちろん琉花も。

　　女生们的手突然间都齐齐停住了。有大半女生还正在换衣服，结果就定在了这个只穿了内衣的样子。其中当然也包含了琉花。

#　な、なに言ってんのあの人。

　　她，她在说什么呢。

#「速水、君は先程から噓をついている。私に接近した真の目的はなんだ？」

　　「速水，你刚刚就一直在说谎。你接近我的真正目的是什么？」

#　周りがドン引きする中で、四十七のやたらいい声が続く。

　　周围的一片哗然中，四十七没有停下她悦耳的声音。

#「教師の命令か？　私の身元を怪しんでいるのか？　私の身体技術を知りたいのか？」

　　「是老师的要求？是怀疑我的身份？还是想知道我的身体技术？」

#　おいおいおい。そりゃあんたはスタイルいいし、足だってみたいに長いよ。顔だってすげーイケてるし、声だってギャンかわだよ。

　　喂喂喂。确实你的气质很棒，腿像螃蟹一样长。脸也长得非常好看，声音也特别好听。

#「残念ながら身体技術について教えることはできない。私のこれは一朝一夕で身につけられるものではないし、特殊な適正が必要となる。諦めたほうがいい」

　　「不过很遗憾，身体技术相关的事情我没办法教你。我这种水平不是一朝一夕就可以做到的，而且还需要特殊的条件。你还是放弃吧」

#　でも、そんなひどいことをストレートにぶつけたら、

　　但是，如果直面这么凶的质问，

#「そ、そんなつもりは……なくって……うぅぐ……んんっ……」

　　「我，我没有那种……那种想法……呜呜……嗯嗯……」

#　気の弱い女子なら泣いちゃうでしょ。

　　柔弱的女孩子会哭出来的吧。

#　琉花たちや運動部グループならなにか言い返せただろうし、サブカルグループだったら愛想笑いで済ませたり、話題そらしができただろう。

　　如果是琉花几位或运动组的话，多半会反驳几句话。要是次文化组多半会笑一笑含糊过去，然后换成下一个话题吧。

#　だが、速水ちなみはそうではない。

　　但是，速水千海不是这种女生。

#　彼女は真面目であるからこそ委員長で。真面目であるからこそ教師に頼られがちで。真面目であるからこそ人の言葉をまっすぐ受け止めてしまうのだ。

　　她正是因为认真才会当上班长。因为认真才容易得到老师的信任。因为认真也更容易被他人的言语影响。

#「うぇ……ふうぅ……」

　　「呜……呜……」

#「委員長。大丈夫？」

　　「班长。还好吗？」

#「ちなみ。こっち来な」

　　「千海。来这边」

#　顔を伏せてえぐえぐと泣くちなみの周りに女子たちが集まってくる。肩に手を添えたり、四十七との間に入って壁になったりしている。

　　女生们都聚集到了低头哽咽着的千海的周围。有的用手扶着千海的肩膀，有的隔开了四十七和千海。

#　四十七はそんな女子同士の連帯を冷めた目で見つめていた……、

　　四十七看着女生们的行动，十分冷漠……，

#「ム……私はただ質問しただけで……傷つけるつもりでは……」

　　「嗯……我只是问她几句……没有想要弄哭她……」

#　……わけではなく、狼狽していた。

　　……才怪，是惊慌。

#　泣かすつもりじゃなかったんか!?

　　没有想要弄哭她！？

#　琉花が内心でツッコんでいると、ちなみを囲む女子たちから四十七に敵意あるが向けられた。他の女子たちからもほのかな嫌悪を感じる。

　　琉花心里嘀咕着，围在千海周围的女生们用充满敌意的眼神盯着四十七。其他的女生们也都对四十七隐隐地释放着厌恶。

#　怒りによって空気が汚染されている。まだ誰も行動に起こしていないが、このままだとが始まってしまう。

　　空气都被这怒火污染了。要是没有人采取行动的话，这样下去四十七就要被群起而攻之了。

#　仕方がない。ここは一肌剝き……一肌脱ぎますか。

　　真没办法。这叫做一笔……一臂之力吧？

#「あんさ～！　四十七さんさぁ～！　な～んであんなひどいこと言ったんすかぁ～？」

　　「那个啊~！四十七同学啊~！为~什么要说那么凶的话啊~？」

#　わざとらしく大声を出すと、その場の視線が琉花に集まった。

　　琉花故意提高了音量，现场的视线一时都聚集了过来。

#　部外者に対しての当然の反応。だが、ここで引いたら事態はもっとこんがらがる。かっこつけていかないと……下着姿でかっこつけもなんもないけども。

　　这是她们对琉花插手的自然反应。不过，只是这样的话只会把事情弄得更糟。不赶紧再装装样子的话……虽说只穿着内衣的也说不上什么装样子吧。

#「つか、噓はやめてってなに？　なんであんたに噓かどーかわかるわけぇ？」

　　「还有，别说谎了是什么意思？你怎么会知道她有没有对你说谎的？」

#　四十七の発言はちなみへの警戒心から出たものだろう。知り合ったばかりの人間に見え見えのお世辞を言われてったというのもあるかもしれない。なんにせよカマかけ以上のものではないはずだ。

　　四十七的发言大概是出于对千海的警戒心。也可能是刚刚才认识的人这么明显地向自己套近乎，让四十七有些烦躁。再怎么说，千海应该也不是想套什么四十七的话。

#　そう思っていたので、

　　琉花正这么想着，

#「眼球運動や呼吸速度。表情の機微から、私は他人の噓を見抜くことができる」

　　「眼球的运动、呼吸的速度还有微表情。我可以从这些看出一个人在说谎」

#　真顔で『噓を見抜ける』と言われて驚いた。

　　然后就被认真地说出『看破谎言』的四十七惊到了。

#「んなことあるわけ……」

　　「怎么会有这种……」

#　言葉を止める。

　　琉花的话噎住了。

#　琉花が四十七銀華のことを知ったのはたった数時間前だ。彼女の性格も知らなければどこから来たのかも知らない。彼女を否定するには早すぎる。

　　琉花也不过是在数小时前才认识四十七银华这个人。既不了解她的性格，也不知道她出身何处。就这样否定她也太轻率了。

#　琉花は言いかけた言葉を飲み込んでから、

　　琉花收住了已经到嘴边的话。

#「んじゃ、あたしのお母さんの名前はときわだ。これはどう？」

　　「那，我妈的姓是常磐。怎样？」

#「噓だな」

　　「你说谎」

#　食い気味に即答され、息が詰まった。

　　琉花话音未落，四十七就回答了。气氛紧张了起来。

#　こんなに早く噓が見抜かれるとは。彼女の言っていることは本当なのかもしれない。

　　这么快就被看穿了。看来她说的说不定是真的。

#「……噓とわかるだけで本当の名はわからないが」

　　「……虽然知道是说谎但我并不知道真名是什么」

#　四十七の呟きで平静を取り戻す。

　　四十七借着这句话恢复了平静。

#　ひとつ見抜かれただけで決めつけるのは早い。もう少し質問を続けよう。

　　只是看穿了一个而已，做出判断还太早了。再继续说几个吧。

#「あたしの友達はめいりとひなるだ」

　　「我的朋友是芽里和日菜瑠」

#「それは本当だ。他に友人がいる可能性はあるが、そのふたりが君の友人というのは本当のことだ」

　　「这是真的。虽然可能还有其他朋友，但这两个人确实是你的朋友」

#「あたしの胸はＤカップだ」

　　「我的罩杯是D」

#「噓だ。それより上か下……いや、その反応は上だな」

　　「假的。比D大还是小……好的，你的反应是比D大」

#「すごっ！　あんたマジで噓見抜けんじゃん！」

　　「好强！她还真的能看出我在说谎！」

#　驚きとともに周りを見回し、女子更衣室の面々と感情を共有する。

　　琉花带着惊讶看了看周围，女子更衣室的大家也都满脸惊讶。

#　四十七銀華は噓を見破ることができる。

　　四十七银华能看穿谎言。

#　その事実が女子たちに浸透し、空気が別方向に傾いたことを感じた後、琉花はもう一度四十七に向き直った。

　　在女生们慢慢理解了这一事实，又感到气氛有所缓解之后，琉花再一次看向了四十七。

#「んで、改めてだけど、さっきの噓はやめてってなんなん？」

　　「那，虽然问过了，你之前说的别再说谎了，是什么意思？」

#　四十七に噓を見抜く能力があることはわかったが、先程の発言がどういう感情から出て、どういう意図を持っていたのかはまた別の話だ。そこをハッキリしなければこの場は収まらないし、ちなみの涙は止まらない。

　　既然知道四十七能够看穿谎言，那么之前的发言是出于什么感情，抱有怎样的意图，就是另一回事了。不说清楚的话，现在就没法收场，也没办法止住千海的泪水。

#　四十七はちなみにちらりと目を向けて、

　　四十七瞥了一眼千海，

#「速水は自分の感情に噓をついていた。私との接触に過度のストレスを感じて、それを必死に抑え込み、苦しんでいた。なので、私は近づいた理由を聞き出して、やめたほうがよいと伝えたかったんだが……」

　　「速水违背了自己的感情。和她的接触中我感到她有很多压力，但却拼命压抑着，非常难受。所以，我想听听她靠近我的理由，想告诉她不必这样比较好……」

#「気ぃ遣った的な？」

　　「原来是关心？」

#「そうだ。教師の命令であれば従う必要はないと言いたかったし、私の身元を探っているのであれば気にするなと言うつもりだった」

　　「是啊。本来想说如果是老师的要求的话不必勉强，或者想询问我的身份的话就别太在意了」

#「あんた、それ……口下手すぎっしょ…………へっ、へへへっ」

　　「你啊，那个……也太不会说话了吧……哈，啊哈哈」

#　気まずそうに目をそらす四十七を見て、琉花の口元が緩んだ。

　　看到不好意思地挪开视线的四十七，琉花心里放松了下来。

#　なんだ。いかつい見た目してるけど、意外とかわいいところあるじゃん。

　　什么嘛。看上去凶神恶煞的，但其实意外得可爱嘛。

#　琉花は肩から力を抜くと、真面目グループに向けて目を動かした。

　　琉花放松了身体，看向了正经组的几个人。

#「まー、あんたの気遣いもわかるけどさ。ちなみの頑張りもちょっとは認めてあげなよ」

　　「总之，我算是明白了你的关心。那你也该对千海的努力表示一下认可吧」

#「頑張り？」

　　「努力？」

#「そそ。よくわかんないフクガクセーと仲良くしようとしてることとか。みんなの委員長するために気ぃ張ってるとことか。センセーらの期待を背負って……えるだっけ？　……まあどっちでもいいや。ともかく、ちなみは頑張ってるわけ。ウゼーかもしんないけどさ、ちょっとくらいは認めてあげて欲しいっつーか」

　　「是啊是啊。要和不熟的复学生处好关系啊。要发奋当好班长啊。承担着……回应着？老师们的期待啊……反正不管哪个都好。总之千海一直都为之努力着。虽然可能也会让人觉得有点烦啦，但还是希望你能认可她的这一份努力吧」

#　琉花の言葉を聞いて四十七は唇を奥に巻いた。反論する気はないらしい。

　　听着琉花的话，四十七抿起了嘴。不像是要反驳的样子。

#「それに最初はやな感じでも、つるんでみたら意外と合うかもしんないっしょ。初対面でＮＧは人生損っつーか……楽しくなくね？」

　　「而且就算是一开始感觉不好，但多接触一下说不定还意外得合得来呢。仅靠第一印象就拒绝的话岂不是人生的损失……乐不起来对吧？」

#　お、あたし今かなりいー女っぽい。

　　啊，我现在真是超级好女人。

#　そうやって琉花が自画自賛していると、四十七が沈痛な面持ちで小さく頷いた。

　　琉花心里正这样自卖自夸的时候，四十七带着沉痛的表情轻轻点了点头。

#「……君が正しい。私が短慮だったようだ」

　　「……你说得对。是我谋虑浅陋了」

#「タンリョってなに？」

　　「眸绿潜漏是什么？」

#「考えの足らない愚か者、ということだよ」

　　「是说考虑不周的意思」

#　四十七はそう言うと口元を緩ませて、

　　四十七的语气也缓和了下来，

#「君の名を教えてくれないか？」

　　「能否请教一下你尊姓大名？」

#「あたし？　あたしは盛黄琉花だけど……」

　　「我？我叫盛黄琉花……」

#「そうか……ありがとう。盛黄」

　　「这样啊……谢谢你。盛黄」

#「いいってことよ」

　　「没事哦」

#　肩をすくめつつ、周りを眺める。

　　琉花耸耸肩膀，看了看周围。

#　女子更衣室に充満していた緊張感は消えていた。四十七の気遣いとちなみの気遣いがすれ違って起きた事故だということが女子たちに伝わったようだ。

　　充满在女子更衣室里的紧张消融了。女生们也都反应过来刚刚的事情只是起源于四十七的关心和千海的误会。

#　琉花が後ずさりすると、四十七はちなみに向かい合った。

　　琉花向后退开，四十七看向了千海。

#「速水さん。私はあなたの厚意と勇気を無下にし、侮辱してしまった。本当に申し訳ない」

　　「速水同学。我罔顾你的好意和勇气，折辱了它们。实在是对不起」

#　四十七が頭を下げると、ちなみはしばらくその姿を見つめていた。

　　千海盯着低头致意的四十七看了一会。

#　うんうん。四十七さんも謝ったし、ちなみには四十七さんの考えが伝わったし、丸く収まって……、

　　嗯嗯。顺利把四十七同学的想法传达给了千海，四十七也道歉了，完美收场……，

#「い、いまさらそんなこと言われても……うぇぇぇぇ！」

　　「就，就算你这么说也……呜呜呜呜呜！」

#　……んま、ちなみからしたら知ったこっちゃないか。

　　……啊呀，看样子并没有好好传达给千海啊。

#

#　この事件の後、四十七銀華がやべーやつということは女子たちの共通認識になった。

　　这件事之后，四十七银华十分やべー成了女生们的共识。

#　もちろん、すぐに男子たちの共通認識にもなったけど。

　　当然，这一点很快也会成为男生们的共识。

#

#